

平成30年9月11日

「この人に聞く」成熟社会と建築

南 一誠（みなみ かずのぶ）氏



プロフィール 1956年石川県生まれ。芝浦工業大学工学部建築学科教授，一級建築士。1979年東京大学工学部建築学科卒業，1981年東京大学工学系研究科建築学専攻課程修了，1986年マサチューセッツ工科大学大学院修了。郵政省大臣官房建築部，建設省大臣官房官庁営繕部勤務を経て，2005年4月より現職。2008年より学長補佐。2014年より大学院建設工学専攻主任。日本学術会議連携会員。

専門分野は，建築構法計画，建築計画，建築設計。現在の主たる研究テーマは，公共施設の品質向上と市町村合併に伴う公共施設再編，持続可能社会における既存住宅ストックの再生など。都市住宅学会著作賞，北米照明学会賞優秀賞，千葉県建築文化賞，千葉市優秀建築賞，日本建築学会「都市の発展と制御」論文優秀賞など受賞多数。

芝浦工業大学工学部教授である南一誠氏に，研究テーマの一つである「建築ストック活用」の現状と展望について伺った。

■ 建築は未来をつくる仕事

経年が進んだ建築ストックの増加については，単に建築のハードの問題だけではなく，建築物と社会，地域や生活者との関係がどう変化していくかに目を向けることが重要であると考えています。私の講義では，学生に「皆さんの仕事は未来をつくる仕事」なので，将来，どのような社会を実現したいのか，そのためには，今，何をしなければならないのかを考えるように訴えています。若い人が社会に出て，建設する建物は100年くらい使われますので，2100年を超えて使われる建築物や都市をつくるという思いで勉強しなければならない。地球環境問題，ヒートアイランド現象，超高齢社会における人口と施設の mismatch，東京一極集中と地方の問題など，建築に関わる者にとって考えなければならない課題が数多く存在しています。つまり，建築を通して社会の持続可能性を考えるのが我々の仕事であると，学生には説明しています。

私の講義で紹介する世界各国のコンバージョン（用途変更）の事例に

若い人たちは関心を持ってくれます。建築設計演習では図書館の課題を担当していますが、新築に限らず、既存の建物を活用する提案をしてもよいことにしています。既存の建築には地域で担ってきた役割があり、コンバージョンには新しい関係をつくるクリエイティブな側面があります。若い人は、継承と創造の両方がある、難しいがやりがいのある仕事に興味を持っています。

建築や居住環境を時間軸で考えていくというのは、建築が歴史的に培ってきた手法です。モダニズム建築は特定の機能に最適なものをつくってきましたが、これからはそういう考え方だけではやっていけません。少し大げさに言うと、建築ストック活用は、建築に対する考え方を大きく変える契機になるのではないかと思います。

■海外のストック活用事例

昨秋、英国の『Architectural Design』誌が、世界各国の建築ストック活用などに対する取組みについて、特集号「Loose-Fit Architecture : Designing Buildings for Change」を出版しました¹⁾。1971年から1973年にRIBA（英国王立建築家協会）の会長だったゴードン氏は会長就任にあたり、これからの英国建築は“Long Life, Loose Fit and Low Energy”であるべきと宣言しました。日本に比べて英国の建築は長寿命ですが、これからの英国建築の躯体はLong Lifeに、インフィル（内装）はLoose Fitにつくりましようと言ったのです。機能主義の建築は、機能に即して建築をつくってきましたが、それでは社会の変化にうまく対応できない。そうではなく、変化に対応できるアダプタブルな建築をつくるべき。そうすれば、結果的に建築は長寿命になり、資源の有効利用やエネルギーの削減になると、石油ショックの前に指摘したのです。その考え方が再評価され、「Loose-Fit Architecture」という特集号が昨年出版されました。私は「Long Life, LooseFit」を意識して、「しなやかに変化する建築」と表現しています²⁾。洋服は体型に合わせてジャストフィットでつくります。そのため少しでも太ると着られなくなってしまいます。一方、日本の着物は、太っても痩せても着ることができます。これからは建築も着物のように、しなやかに変化に対応できるようにつくっていくべきと考えています。

ヨーロッパで数多く行われているコンバージョンは、建築を単に長寿命化するだけでなく、まちや地域の活性化との関係も重視しています。例えば、チューリッヒ・ウェスト地区は工場地帯を大規模に再開発したのですが、駅前にあった大きな乳製品工場を5,000人の学生が在

学する芸術系大学にコンバージョンして、若い人で賑わうまちに生まれ変わらせています。ニューヨークのハイラインは、マンハッタンの廃線となった軌道敷を用途転用して、都心を貫く遊歩道にしたものです。また、パリのバスチーユの旧高架鉄道跡は、今は緑あふれる遊歩道になり、マンションに直接入れる魅力的なアプローチになっています。都市の遺産である建築やインフラを時代の変化に合わせて再生することは、魅力あるまちづくりのために有効です。

■ストック活用に必要な診断技術の向上

ある工業化住宅メーカーなどは、30年間の耐久性を有したシーリングを開発し、定期的な点検を条件に、30年に1回、シーリングを打ち替えればよいことにしています。一方、マンションの大規模修繕工事については、最近、管理組合の修繕積立金が不足する傾向があります。高齢化が進み、年金生活者が多くなっている中、工事のために多額の費用を臨時に集めるのは困難です。つまりマンションにおいては、ハード面での長寿命化だけでなく、経済的な側面でもサステイナブルであることが重要です。経済性を確保するためには、適時的確に、過不足なく、必要な補修工事を実施することが必要になります。医師がまず診断をして治療方法を決めるように、建築ストックの有効活用のためには、劣化状況を的確に診断する技術を確立することが求められています。

■建築ストック活用の今後の展望

建築の分野において、新しい価値を生み出すイノベーションは、どのようにすれば生まれるのでしょうか。私は、建築ストック活用や、変化する社会のニーズに対応することが、新しい仕事を生み出すと考えています³⁾。日本はこれまで官と民が力を合わせて継続的に技術開発をしてきた国です。民間企業は先端的な技術開発が得意ですが、技術だけではイノベーションは実現しません。これからも、行政が担っている法律や規制緩和などの社会システムの整備と、民間が得意とする技術開発を車の両輪として、うまく組み合わせて進める必要があります。地方創生が国の重要課題となっており、公共施設再編も喫緊の課題ですが、施設単体の長寿命化の話としてではなく、都市や地域計画にどう位置づけるかを含めて議論をしないとイケません。土浦市や栃木市などで、駅前の大規模な空きビルを市庁舎に用途転用したのは、都市戦略的な必要性があるからです。公共施設には、災害時における市民生活の安全確保や地域文化の継承など、公共でなければできない役割がありま

す。

このような状況を踏まえると、（一財）建築保全センターが担っておられる業務への期待は、今後、ますます大きくなっていくと思います。

（参考文献）

- 1) Loose-Fit Architecture : Designing Buildings for ChangeAD, 2017.9—10, Profile249, Vol.87, No.5, Willy.
- 2) 南一誠「しなやかに変化する建築建築ストック活用の手法（建築に学ぶ先人の知恵世界の伝統的建築構法Vol1.0）」、『建材試験情報』Vol5.3, 2017年11・12月号, pp2.8—35（, 一財）建材試験センター, 2017. 113）南一誠「住宅・建設産業のイノベーションー建築ストック活用と社会変化がもたらすものー（建築に学ぶ先人の知恵世界の伝統的建築構法Vol.7）」、『建材試験情報』Vol5.2, 2016年12月号, pp1.4—19（, 一財）建材試験センター, 2016. 12